

ムーンメモリア・ロストノイズ
二十話…過去を辿る道

雨和七瀬

「……『竜域に近いボード村では、時折空を舞う竜の姿を見ることもあります』……どうですか？」

「完璧だ。正しく読めている」

ブランカはこの国の地理について書かれた『フィッツウィリアムの歩き方』の囲み記事を、多少言葉に詰まることはあるが読めるようになっていた。

「やった、勉強の成果が出ましたね！」

ブランカは朗らかに笑う。ルークは何か気の利いたことを言おうとするものの、なかなか言葉が出てこなかった。ブランカはそれに気づくこともなく、楽しげに話し続ける。

「それにしても『ボード村』ってすごい所ですね。竜……見たことないと思うので、見てみたいです」

竜を見たいというブランカの感性に、ルークはやはり自分たちとはどこか違うと感じた。

「へえ、竜に興味あんの？ 怖がる奴も多いってのに」
ユノもブランカの考えを面白そうに聞いた。ブランカは「興味、というか……」と言葉を選ぶように考え込んだ。

「興味もあるんですけど、記憶の頼りになれば良いな、というのもあって。ほら、珍しい槍が自分の身体に染みついた戦い方に合っていたじゃないですか。それがきっかけで、改めて自分の過去が気になっちゃって」
段々と、真剣な顔つきに、そして愁いを帯びたものへ変わっていく。

(同じことに、気づいていたか)

ルークは胸を締め付けられるのを呼吸でいなしつつ、ブランカに向けて改めて言葉を紡ぐ。

「……失伝していた薙槍の使い手であるというのも、仮定に過ぎない。それに、海の外から来たということがあり得ない以上、探せばどこかにお前を知る者が居る。悲観的になる必要は無い」

しかしどこかでやはり自分に言い聞かせていた。期待しすぎてはいけないのだ、と。

「そうだけ、ブランカ。自分の事をもっと知りたい気持ちも大事だけどさ、もつと今を楽しもうぜ！ ボード村には土産物とか売ってるって書いてあったる？ 討伐の依頼が終わったらそういうのも見に行こうぜ！」

ユノにしては珍しく、長々と話す。場を明るくしようとしているのが伝わってくる。ルークはその気遣いを汲み、ゆっくりとブランカを見据える。普段袖が膨らんでいて気付きにくかったが、ただでさえ細い肩が縮こまって、ルークには本当に小さく見えた。

「そうだな。過去にばかり目を向けていてはもったいない。俺達が居るのだから……お前は、前を向いている」

ルークは途中で言い淀んだものの、ブランカの目を見たら訂正する気は失せていた。ルークの視線の先、ブランカは少しだけ目を潤ませた。ルークは発言を後悔しかけたが、ブランカが袖で顔をゴシゴシと拭き、もう一度顔を上げると、綻んだ顔を見せた。

「……ありがとうございます」

ユノはブランカの言葉に耐えきれず、「ブランカあ」と気の抜ける声を上げながらブランカに抱き着いた。フワフワとしたユノの髪が掛かるのをブランカはくすぐったそうにしながらも、ブランカはそつとユノに手を添えた。

夜も更けつつある中、報告のために記録を残しているルークの元へブランカが寄ってきた。その足音でルークは筆を置き、顔を上げた。寝る前に何か気になることがあったのか、髪留めを外した状態で携帯枕を抱えていた。

「ルークさん、今いいですか？」

「構わない。どうした？」

ブランカは指と足をもじもじとさせながら、ゆっくりと口を開いた。

「その……私、ルークさんの研究の役に立っていますか？」

「急だな。まだ結果が出ていない以上、今のお前がどう役に立つかは分からないが……少なくとも、何も手がかりが無いよりは良いはずだ」

ルークはなるべく言葉を選んで答えたつもりだったが、ほんの一瞬だけ、ブランカの表情に陰りが見えた。ルークは謝罪しようとしたが、その前にブランカはキリっとした表情で声を張り上げた。

「じゃあ早く色んなこと思い出せるように頑張ります！お邪魔しました、おやすみなさい！」

早口で捲し立てると、ブランカはそそくさと天幕へ駆けていった。

「……おやすみ」

ブランカが入っていった天幕から明かりが消えるのを見届けてからしばらくして、ユノが焚火にくべる枯れ枝を拾って戻って来た。

「ただいまー、ブランカは……寝た？」

ルークが無言で頷くと、ユノも静かに頷き返し、杖を置いて見張り番の用意を始めた。普段がさつではあるが兵士として訓練されている分、野営道具の扱いは相当に手練れているのが、今日の出来事を手帳に記録しているルークの目に映った。視線を戻したところで、筆はずつと止まったままだった。

ルークがまたユノの様子を観察していると、ユノは腰に下げていた水筒を片手で取り出すと中を覗き込み、そして逆さまに振った。留め具と本体がぶつかってカラカラと軽い金属音を出す、水は一滴出てきたきりであった。

「あー、水も切れてんのか。ルーク、オレ水汲み行ってくる。作業終わったら先に休んでくれ」

「ああ、分かっ……」

ルークが答えるのを聞く前に、ユノは結界を跨いで獣道に足を踏み入れていた。その代わりのように、夜の静けさが結界の中へ一気に入り込んでくる。ルークはユノに「先に休め」と言われたものの、彼女の帰りを待つという名目で焚火の前に座り直し、先程の会話を省みっていた。

『俺達が居る』……これを気にしたんだろうか、無責任な発言だった)

もし、ブランカの記憶を辿りきる前に『研究』が達成されてしまったら。ブランカと関わりの無い要素で事足りてしまったら。——ブランカを知ること、意味が無ければ。

(ブランカを急かすつもりはなかったんだが……どうも彼女の自責思考な部分を刺激してしまう)

ルークは針の刺さったように痛む胸を握りつぶすかのように押さえつけ、ゆっくりと呼吸する。夜風が目に染

みる。こんなことに思いを巡らせるよりも夜警をユノに任せて寝るべきだ、そう考えれば考えるほど、意識が冴えていく。

焚火の煙が昇る先を目で追っていくと、満点の星空を切り裂くような光の筋が現れては消えていくのが見えた。いくつか消えずにいる流れ星は、北の地平へ落ちていく。

——竜の国には、毎晩星が降る。

まだフィッツウイリアムが統一される前から伝えられてきた大陸の伝承の一つ。調査によってその降ってくる『星』というのが『異物』であることが判明してからは、今流れた光の筋も、ルークにとっては単なる研究対象の一つでしかなくなってしまった。だということに見上げてしまうのは、それが——。

「考え事か？」

水汲みから戻ってきたユノが、視界の空を覆う。

「……そんなところだ」

ユノはルークの返事を聞くと、ユノは水瓶を置くとルークの横に座った。そしてルークが見ていた星空を同じように見上げた。

「おおー、やっぱ竜域の流れ星はキレイだな」

打ち明けるように促すわけでもなく、待っているような待っていないような、どちらでも構わないとでもいうようにただ横に居る。それがルークにとっては固く結んでいた口を開くのに気が楽になるのだった。

「……竜域の近くまで来るとは、ずいぶん遠くに来た」
核心には触れず、傷の縁をなぞるように語る。ユノも
「そうだな」と快活に返す。

「今までの行って帰っての繰り返しと違って、旅行して
みたいでめちゃくちゃ楽しいな！」

ユノらしい考えに、ルークは一つの懸念点を肩から降
ろした。

「気楽だな、お前は……任務に変わりはないだろう？」

ルークは窘め半分、純粹な疑問半分でユノに訊ねると、
ユノは笑いながら答えた。

「でもブランカのためにやってることは任務と関係ない
だろ？ ルークだって楽しんでるじゃん」

そんなことはない、と言おうとして、ルークは己の行
動を振り返る。武器、言葉、防具……と思いついていく
うちに出かかった言葉が解けていった。

「……オレさ、良かったと思ってるんだ。ブランカとルー
クが仲良くなってるっていい」

思いがけない発言に、ルークの心臓が跳ね上がる。

「そんな事……ブランカは、研究対象で……」

「じゃあ武器の事とか分かったらさよーなら、ってか？」

苦慮していたこと、そのままをぶつけられる。ユノ本
人はそう思っていないのだろう、というのがルークには
想像がついた。なら適当に返しても、ユノは軽く相槌を

打ち、そのまま話を続けるだろうが、ルークは胸につか
えているものを押し出すように喉を震わせる。

「……当然、だろう」

ルーク自身、目が泳いでいることがよく分かる。ユノ
も「へえ……？」と怪訝そうにした。しかし深追いして
くることもなく、ユノはまた天を仰いだ。

「ま、そんな時が来たらまた考えよーぜ」

同じ空を見て、ユノはルークの焦点とはまた違った答
えを出した。

「それでいいじゃねーか」

ユノが目を向ける。焚火の影が目の奥に映り込んでも
なお、真つすぐに。その視線に、ルークは一つ気付きを
得た。

(……未来に不安を覚え続けるのも、同じか)

ルークが強張っていた肩の力を抜くと、焚火の揺らめ
き、それに混ざる火の粉の鮮やかさ、それが目に焼き付
いていく。枝をくべるかは燃え盛る今決めなくても良い。
そう思えてくると、だんだんと胸の痛みゆっくりと染み
渡るように消えていく。

「……まだ、調査すべき事は多く残っているからな」

ルークは立ち上がり、外套に付いた土を払うとブラン
カが寝ているのとは別の天幕に向かう。

「……見張り、任せたぞ」

「ああ。ゆっくり休めよ、ルーク」

入り口を閉じ、暗く静かになった空間で、ルークは上着の留め具を外し、眼鏡を鞆にしまつて横になると、毛布と外套を肩に掛ける。まだ冷たいものの、悩みの晴れた頭の中には深くなつた呼吸音と睡魔だけが入つて来るのだつた。

〈二十一話へ続く〉